

第2回 邑南町小中学校の在り方検討委員会会議録（要旨）

1. 日時 令和7年7月29日（火）13：45～15：30
2. 場所 邑南町健康センター元気館 会議室
3. 出席委員 松本委員長、山下委員、山中委員、武田委員、土田委員
4. 事務局 原課長、甲山補佐、野田

[開会]

1. 学びのまち総務課長あいさつ

2. 議題

（1）邑南町の小中学校の在り方について

①第1回会議を振り返って

松本委員長：

- ・ 初回は、自分たちが集まって、どういう方向に向けて議論を重ねていくのかを確認。

要点

- ・ 邑南町では、小中学校の在り方検討委員会と邑南ラボ共同研究の2つで、小中学校の在り方を検討していく。町のいくつかの課題、人口減、少子化、町の在り方、存続、そういうキーワードのもと、本委員会では、小学校、中学校の在り方について考えをまとめていきたい。
- ・ 子ども達がどういう学びをするのかという問題と、子ども達を含めた地域にどう問題、課題があるのかを考えていくことになる。本来、子ども達の小中学校の学びと地域とは切っても切り離せないものではあるが、町長はそれぞれ分けて、この委員会では子ども達の学びを中心に、もう一つの研究では地域がどうあるべきか、どうしていったらいいのかを諮っている。
- ・ 最終的には、この2つの意見を踏まえ、町長、教育長、議会がその先を決めていく。
- ・ 1回目の会議では、自分達の気持ちを自由に話してもらい、子ども達が中心という事を共有した。
- ・ 2回目以降は、子ども達の成長、学び、邑南町の中でどういう風に育っていくのかがいいかを考えてまとめていく。
- ・ 3回目以降は、1回目、2回目を振り返って、どういう学びが子ども達にとって良いのかという事をもう少し深める。学校の在り方について委員の意見をまとめてここで議論したい。

- ・ 1回目で子ども達にどういう学びがあったのかを過去の新聞記事を振り返り共有した。また邑南町の子ども達のこれまでのふれあいや関わりを共有して、確かにこの5人の委員で子ども達の未来を考えていったらいいのではないかという事になったと思う。
- ・ 町民の皆さんの思いに寄り添いながら進めていきたい。

今回から会議の傍聴を行うので、簡単に前回の振り返りと自己紹介などをしてもらえたらと思う。

(各委員の自己紹介)

②学校と地域の関わりについて

松本委員長:(資料1・2の説明)

資料1

- ・ ふるさと教育の各校の重点目標
邑南町の小学校、中学校がそれぞれの学校でどういう目標を立ててふるさと教育を進めてきたのか。

【キーワード】

羽須美中学校…地域の人や文化、愛する心を育てる⇒地域

阿須那小学校…阿須那の良さを知る。阿須那を愛する子どもの育成、地域愛
⇒地域

口羽小学校…自分を大切に、つまり自己実現。人と繋がるのが大好きな子どもを育成、つまり協働。そういう人を育てたいというのが口羽。

瑞穂中学校…積極的にふるさとに関わる、ふるさとの活性化、主体的に学ぶという事とふるさとというところで子どもの育成を目指している。

高原小学校…生きる喜び、学ぶ楽しさ。

学校教育で学ぶことの有用性というのは日本は今、非常に遅れている。やはり邑南町は学ぶ楽しさを後押しする地域の力や伝統、文化、自然がある。そういう事を高原は言っているのではないか。社会の一員として、家庭、地域と連携しながらという事。

瑞穂小学校…地域の教材や地域の人材⇒地域

ふるさとへの愛着という言葉があるが、後半はふるさとを愛する心、自ら学ぶ意欲。

- 市木小学校…ふるさとを知り、ふるさに誇りを持ち、ふるさを大切にという事が1つ。もう1つは地域の教育資源。ひと、もの、ことを大切にして豊かな心を培うという事。キーワードはやはり地域ということだと思う。
- 石見中学校…地域を知る事、地域の良さという事がポイントとして始めにあり、その次に活動。地域の人との活動という事が書かれている。その地域の活動の中で自己実現。自分がどういう立ち位置なのかという事を言っていると思う。合わせて、社会の中で生きていく力を育成しているという事だと思う。
- 石見東小学校…国語、算数、理科、社会、それぞれの教科を大切に。そういう教科学習を通して地域の良さに気づかせるような教育。ふるさと学習にも力を入れているという事で歴史や文化という事。ふるさを大切に。これはすべての学校共通だと思う。
- 矢上小学校…豊かな自然。これは凄く共感する。日本全国、地方、地域の方が多いが、この豊かな自然を活かした地域での活動が非常に多いと思っており、この豊かな自然というのが目標の冒頭にあるのが印象的だと思う。
- そこから身近な人や地域を大切にするという事が書かれている。ふるさとの良さや温かさ。この温かさというのは、いろいろな地域が日本にはあるが、この地域は人が優しい、温かさがあるということがキーワードになるのではと思う。
- 日貫小学校…地域の自然や文化。矢上小学校と同じでやはり地域の自然、文化を基軸に探究的な活動を通して、子ども達の学びが向かう姿を育てていこう。そしてふるさとの素晴らしさという事が書かれている。

※ どの小学校中学校も共通して見えてくるものがある。

資料2

- ・ はばたき講座のチラシ
(=矢上高校、石見養護学校高等部の3年生を対象に、邑南町で活躍する人たちの話を聞き、ゆくゆくは邑南町に帰ってくる、関わり続けたいと思ってもらうきっかけづくり。自分自身の人生を考えるヒントを得る機会)
- ・ 令和2年から7年に寄せられたアンケート回答抜粋(邑南町に関する意見)
- ・ 新聞記事

松本委員長：

(アンケート回答を読み上げ)

育目標にふるさと、自然、地域の良さというのがふんだんにあり、その教育効果が今現れているのではないかと思う。

- ・ この教育効果というのは、私達がこの委員会でこの先を考えるのに非常に重要だと思う。高校生のはばたき講座のアンケートでは、地元に戻って来る気はなかったが、地元はいいなと感じている子どもがいることがわかる。学校の中での学びと、はばたき講座のような学校の外での学びが、本当に一体になれば良いのではという感想を持った。

山中委員：

- ・ 私も今の松本委員長と同じことを思っていた。やはりずっと前は、学校の教員が責任を持って子ども達を教育する、これが使命だという意識が非常に強かった。だからどちらかといえば地域と学校は遮断していて、家庭も昔の人がよく言う「学校の先生の言う事をよく聞くように」と言って預けておけばいい、何とかしてくれるというような関係があったのではないだろうか。それが段々と学校も、例えば池田小学校事件のように、学校の教員だけでは子どもの安全すら守れないというような事件も起こり、地域の力を借りながら子ども達の安全、安心と一緒に守っていく動きが生まれてきた。
- ・ 教育も社会の動きの中で段々と地域に視点をおいて、そこで目標とする子ども達の資質能力を育てる、地域を題材にした学習を構築していく動きが出てきた。
- ・ 当然地域の事は、学校の教員がその地域の出身ならわかるが、出身でない教員はわからない。そうすると地域をよく知っている地域の方の力を借りないと教育が展開できないことになる。
- ・ 島根県が平成17年から始めたふるさと教育では、ふるさとに愛着、誇りを持った子どもを育てたい、育てようということで県全体で進めている。邑南町も人口減少の危機感からふるさと教育には積極的に取り組んでいると思う。その成果として、地域に対する愛着や誇りを持つ子ども達が増えてきたという事が言えるのではないかと思っている。

松本委員長：

- ・ 平成17年にふるさと教育が島根県全体でスタートした。その成果が確かに現れたと思う。課題を出すことも大事だが、成果の部分と一緒に考えていく事で、成果が継続、持続可能になっていくと感じた。

山下委員：

- ・ 私は、矢上高校が甲子園に行ってくれる事が一番活性化になるのではない

かと思っている。矢上高校の野球部が活躍してくれる事が、小中学校にも良い影響を与えてくれる。

- ・ 私も小中学校の授業研究で、町内 11 校の小中学校に出かけているが、野球をどんどん広げ、深め、町民の皆さんが応援することが、小中学生の学力向上にも繋がっていくのではないかとひそかに期待している。

松本委員長：

- ・ 学校が輝くことが、地域や県全体の誇りになり、それが学力にも繋がり、探究にも繋がるという事かなと聞かせてもらった。
- ・ 今、5人の委員で一致しているのは、ふるさとに対する教育は、今後どういう形になろうとも継続してほしいという事で、全会一致だと思う。ふるさとを愛する、ふるさとの自然や伝統文化そしてスポーツ、こういった事を大事に、今後いかなる体制になろうとも、子ども達を生き生きと育てるにはそれが大事だという事が、結論の1つとして出たと思う。

資料3

- ・ 令和6年 島根の人口移動と推計人口(市町村分抜粋)
 - 県内転入者数・県内転出者数順にみた上位の市町村
 - 転入超過数・転出超過数順にみた上位の市町村
 - 市町村別「居住歴あり」と「居住歴なし」の県外転入者数と割合
 - 市町村別推計人口・人口動態
 - 市町村・移動理由別移動者数

松本委員長：

- ・ いずれにしても人口減という事は否めず、おそらく2050年を見据えると増加するのは東京だけであろうとの推定もある。
- ・ 私達は、今後も邑南町の子ども達の教育を考える上で、予測されている人口減、その中でどのような教育体制を整えていくのか、どういう形が子ども達にとって良いのかを考えていく必要がある。

資料4

- ・ 島根創生計画[第2期]人口減少に打ち勝つための総合戦略アクションプラン【島根を創る人づくりプラン 2025-2029 年度】 参考資料(抜粋)
 - 県外 4 年制大学の島根県出身者の県内就職率、推計就職者数
 - 年間 U ターン者数・I ターン者数

資料5

- ・ 島根創生計画[第2期]人口減少に打ち勝つための総合戦略アクションプラン【島根を創る人づくりプラン】(抜粋)
 - 島根を創る人づくりプロジェクトのイメージ図
 - 推進体制

松本委員長：

- ・ 県のプランとしては、小中高等学校でとにかく島根を愛し、島根の未来を考える子どもを増やす。邑南町に置き換えると、この邑南町を愛する子どもを増やすという事が言える。
- ・ 県では、島根で学ぶ若者を増やす、島根で就職する学生を増やすことを目標にしている。
- ・ 私達は邑南町で就職するという事を子ども達の教育の中で考えることができればいいと思う。

資料6

- ・ 邑南町まち・ひと・しごと創生総合戦略2020(抜粋)
【戦略の体系図】
 - 邑南町人口ビジョンからの4つの重点課題、
 1. 「地域の誇り」に根差した、帰ってきたくなるまちの形成
 2. 地域の実情に応じた生活支援と幸せづくり
 3. 多様な働き方を可能にするしごとづくり
 4. 結婚への希望の実現と、「まち全体による子育て」のさらなる推進

松本委員長：

- ・ ふるさと教育は1を意識していると考えている。
- ・ 2、3はこの委員会での議論とは離れるが、4は土田委員が言われた町全体による子育て、ここは重要だと思う。子どもの学びの中心は間違いなく学校だが、山中委員が言われた、町全体で考える、さらにこれを推進していくという事が2020年にまとめられている。
- ・ 次はSDGsを含めた生きる力を育むことが議論されているという事。

資料7

- ・ 邑南町過疎地域持続的発展計画(抜粋)

松本委員長：

資料3から資料7まで、町の施策、人口の資料を見てきた。子ども達の教育、未来

を考える委員会ではあるが、町の事でもいいので、思いのあるところをこの資料を参考にご発言いただきたい。

武田委員、先ほど子ども達、特に高校生が邑南町に残りたいという子がいることを発言いただいたが、町全体の現状や、今、教育魅力化プランという県全体の施策を見て、邑南町で取り入れられるところ、参考になる事もあると思う。ご意見、ご感想があればお願いしたい。

武田委員：

- ・ 資料を見ていてすごく大事な事だし、多くは上手く回っているのではないかと思っている。一方でこの施策の流れに乗れない、乗らない人達が一定数いると感じている。町が大好きで皆で盛り上げてどんどん新しい事をやっているという人達もいれば、そういうのがあまり好きでない人達もやっぱりいて、好きでない人達に「じゃあ結婚しましょう」とか、「皆で子育てしましょう」、「地域の力」と言うと重荷を感じる人達もいると思う。彼らに対して何か1つの価値観を押し付ける事が正解ではないような気もしている。
- ・ それは大人だけでなく、小学校、中学校、高校でもこの「皆で仲良く元気よく」というのに乗れる子と乗れない子がいる。自己紹介の時に土田委員も話されていたが、不登校の子がそれなりの数おられ、彼らがやはりその流れに乗りにくい。では彼らが生き生きと生きていくためにどんな事が出来るのかというのは、母数が減れば減るほど、マイノリティーがいかに生き生きとしていくかという事が大事だと思っている。
- ・ 資料5のイメージ図のメインストリームだけではなくて、いくつかの経路があって、メインストリームと別の方向もある事を認識し、並列して考えていく必要があると思った。

松本委員長：

- ・ 大変重要な意見だと思った。誰一人取り残さないというSDGsの言葉もある。全体を押し並べて考えるのではなく、例えば特別な支援が必要な子ども達に特化するなど、そういう教育の特化も1つの力になるのではないだろうか。

武田委員：

- ・ もう1つ最近思っているのが、勉強を一生懸命やるのは大事であり、5教科の勉強は大事だと思う。一方で矢上高校の産業技術科の生徒達がとても楽しそうに生き生きしている姿を見ると、彼らはやはり実技が好きで、そういう子達にとっては、中学校での決められた授業を受ける学びの在り方ももう少し変えてもいいような気もしている。

- ・ 中3の勉強とか結構難しい。彼らはそれをかなり苦しみながらやって、高校に入って元気になるから良いが、だったら中学校の間も、もう少し勉強が嫌いで苦手だが、生き生きと過ごせる道というの何かないかと最近考えている。

松本委員長：

- ・ 特に中学校3年生、義務教育が終わる頃の教育が大事だという話。どういう教育が必要なのかという事だと思う。

土田委員：

- ・ 私は、特別支援学校勤務で、この地域でいえば石見養護学校に勤め、中学校から進学してくるお子さんに関わってきた。
- ・ 私が初任の頃は、本当に知的の障害があって特別支援学校に進んできているお子さんが多かったけれど、今は特別支援学校にいるお子さんの実態が変わってきている。
- ・ 知的な障害は軽いが、やはり集団に入りにくい、少人数で自分に合った学びを希望して石見養護学校を選んで来られるお子さんが増えている。不登校傾向にあったお子さんも多い。
- ・ 生徒数が少ないけれど、一括した学びにより、授業についていけないお子さんもいる。個々の実態に応じて丁寧に関わり、この子が何につまずいているのかという点を、もう少し丁寧に把握したうえで学習を進める事ができたら良いと感じている。

松本委員長：

- ・ 「少人数」かなり大きなキーワードだと思う。少人数だからできる質の高い教育、そこを目指して来られる方もいる。そういうニーズを大切にしたいというところは、子ども達の数が減る中で少数の強い力なのかなと思う。

山中委員：

- ・ 特に小学校の低学年や少し支援を要する児童生徒さんに対しては、教職員の体制もより濃い方が支援しやすい環境にあるという部分がある。それは小規模校の良いところで、目が行き届く、手が行き届くみたいなどころもある。
- ・ 反対を見れば、何人もいる中でたまたま女子は1人しかいないとか、小規模校が故に息苦しくなっている人間関係の難しさがあると思う。
- ・ やはりそれぞれの子ども達1人ひとりに目を向けると、どんな環境が良いというのは、どちらとも言えないところがある。なかなか悩ましい課題である。

松本委員長：

- ・ 文科省を始めとして主体的な学びが言われている。主体的なのは1人であろうと大人数であろうと大丈夫だと思うが、「主体的」で「対話的」で「深い学び」、この3つで教育を進めていくとなると、対話的な学びは人数が少ないと難しい。
- ・ 1クラスの中で人数が多いほど逃げる場ができる。ところが山中委員が仰ったように、人数が少ないと、この人とあと何年も付き合わなくてはいけないという事も生まれる。このあたりを教育的で組織的な事で何か手立てを考えるといいのではないかと思う。
- ・ まだ私たちで答えを出しているわけではないが、共通理解として小規模でない方が良い事もあるのではと思った。

山下委員：

- ・ 邑南町の子ども達は、小学生よりも中学生の方が、対話的な学びができていると思う。授業中、わからない子どもに声をかけている姿がある。
- ・ そういう授業を参観しているとその体制の中から子ども達の深い学び、求められる学力が付いていくのではないかと思う。邑南町の子ども達は人権的な学びをしている、人間関係が非常に広い、深いというのか、繋がりのある学びをしている。これは松江市の子ども達にも伝えたい事だと思うことがたびたびあった。
- ・ そういう事を含めてこれから学校の先生方が考えなければいけない事がどんどん出てきているだろうと思うが、生徒の力、彼らの社会性を段々信頼して、彼らでいろいろな事を探し当てていく、訪ね当てていく、求めあっていく力をどんどん引き出していくともっともっと彼らは成長していけるのではないかと、この2、3年思う事は度々ある。

松本委員長：

- ・ 山下委員からは、小学生と中学生を比べた時に、中学生の方が非常に生徒同士や先生から生徒への声かけがあるということで、私も同じように感じている。
- ・ 中学校は、いくつかの小学校が集まって1つになる事が多い。とすると人数が増えるという事もあるが、多様な子ども達の中で育っていく環境がある。
- ・ 私は松江市にいたのでいろいろな小中学校を見ている。中学校を見ると特に大規模校になってくると、山下委員が今言われた、生徒が遠くから別の生徒に声を掛けたりするような人間関係に目配りができなくなる。隣のクラスに誰がいるのか分からない、それは邑南町の中学校ではないのではと思う。邑

南町の中学校では、今の子ども達の関係性や人間関係、先ほど山下委員は道徳的な話を、人権的とされたけれど、そのつながりは続けていきたい。

- ・ これは中学校だが、それでは小学校と中学校とをどう繋げるのか、松江市を始め、義務教育学校や小中一貫校も増えてきている。

資料 8

- ・ 2025 年度出雲市平田地域の 4 校を統合した^{たぶし}旅伏小学校の学校要覧

松本委員長：

- ・ 出雲市立旅伏小学校。これは今年の 4 月に出雲市平田地域の4つの小学校が統合して1つの小学校になった。学校要覧のページを見ると校章があり、4つの小学校をイメージしてできあがっているような校章となっている。
- ・ もちろん私達は、統合ありきではなくて、次の3回目以降に再編した方がいいのか、現状のままでいいのかという事をきたんなく話し合っていくが、今回は先んじて4つの小学校が1つになった出雲市の旅伏小学校の例を見てみたい。
- ・ 学校の概要を見てもらうと、1年生から6年生まで、そして特別支援の学級を含めて全校児童が208名になる。1学年大体30名から40名という人数の構成。4校を統合してもこの人数なので、統合前はかなり少数になっていたというのは想像がつくと思う。
- ・ 私は視察をしてきたのだが、それぞれ4つの学校の文化が違い、地域が違うため、4つの地区をそれぞれ見学したり、理解し合うという事を初年度の今年されているそう。下校のスクールバスは、下駄箱の所に作られた4つの地域のコーナーに児童が集まってきて、集まったところからそれぞれのバスに乗り込んで帰っていく。非常に範囲、面積が広い。
- ・ それはこの邑南町も同じなので、次回以降の委員会でこの学校は非常に参考になると思っている。どうなるかわからないが、本当は校長先生に統合されたメリット、デメリット、どう感じているかというのをこの委員会の委員が視察に行ってみ学させてもらうのがいいと思っている。
- ・ これは出雲市の話ではあるが、先んじてこういう組織体系になった旅伏小学校を見て、これはいいのか、私達に合うのかそうでないのかという非常に大きな参考になると思う。
- ・ 3回目以降、ではどういう未来があるのか、子ども達にとってどういう学校の形が良いのかというのをそれぞれ言葉にしていって欲しいと思う。旅伏小学校の学校要覧は1つの参考資料。

資料 9

- ・ 松江市立義務教育学校八束学園のホームページ写し

松本委員長：

- ・ 小学校と中学校の接続、義務教育学校に島根県で初めてなった八束学園。それを先導された校長先生は、以前石見東小学校の教頭をされていたこともある。その校長先生の話をもたインタビューで皆さんに紹介したいと思う。
- ・ ホームページなどでは、それほど詳しく載っていないが、八束学園は小学校と中学校、1つのクラスがそのまま1、2、3、4、5、6、7、8、9に上がるので、島根県で初の義務教育学校としては非常にやり易かったと聞く。校舎も同じという事だった。
- ・ 「八束色の希望」(学校だより)に学園教育目標が、ふるさとを愛し…、やはりふるさとというのは、島根県どの地域でも重要になってきている。

それでは、この辺りの事例を見て、特に小学校と中学校の繋がりや、先ほどまでの話の続きでも良いし、何かご発言いただけたらと思う。

次回3回目に委員の気持ちをこうなったら良い、いやいや今までの方が良いとか、そういう表明をいよいよしてもらおうと思っている。今回はそれに備えて気持ちを述べていただけたらと思っている。

土田委員：

- ・ 町内の小中学校では、児童、生徒が多い学校は多いけれど、少ない学校は本当に少なく、学年1人とか2人という学校もある。
- ・ 対話的な学習という面で考えると、少人数であっても、何か通信を使うなりしてどこかと繋げて、自分とは違う考えの人がいるんだという事を感じられるようになると良い。国語、算数等基本的な教科は自分の学校だけでやるにしても、総合的な学習は、近くの学校と一緒にできると良い。
- ・ やはり地域に学校があるという事はすごく大事だと思うので、その学校を全部一緒にしてしまわなくても、やり方によってはいろいろな方法があるのではないかと思った。

松本委員長：

- ・ 私も日貫小学校に今から5、6年前まで3、4年連続でずっと通っていたけれど、ある児童が石を好きになり、少人数なのが上手く働いて、子ども達と教頭で石の事を調べることができた。

- ・ 小規模校の魅力はそのままにしたい、やり方しだいで教科によってそれができるのではというようなご意見だったと思う。

山中委員：

- ・ 旅伏小の話があったが、私も平田に勤めた事があるのでいくらか分かるが、ここは4つの小学校が1つになって新築している。昔で言えば別の地域みたいな所なので、徒歩で通えないからスクールバスを出さないと子ども達は通学ができないだろうなとイメージして資料を見ていた。
- ・ そうすると「ふるさとを愛し」などと言って学校教育目標を掲げた時に、子ども達が自分の住んでいるところ以外を取り上げる学習ができるのだろうかと思う。
- ・ そういう心配が取り越し苦労かもしれないし、今その辺も合わせて苦心しているかもしれないが、統合すると子ども達のふるさとへの愛着みたいなものが薄れてしまうのではないかという心配が出てくる。
- ・ 旅伏という広い所が、島根県出身というのと同じように自分のふるさとだというのはあるかもしれないが、もっと旧小学校区のことについて知るとか、知って関わって愛着や誇りを持って、それを担いたいと思うみたいな発展過程を考えた時に、その子達はそのような過程を踏む学習や、その先にある心情や実践することに繋がるか少し心配だ。

松本委員長：

- ・ 旅伏小学校の校長先生も同じような心配というか苦労をされている。なので4つの地域を順番に巡って、それぞれの地域を学んでいく取組みをどこかの時間に入れているようだ。
- ・ やはり地域を愛すると言っても面積が広がってしまうので、自分たちが行き来する地域の人たちとの距離が遠くなって、関係性が薄くなってしまおうという危惧がある。
- ・ 統合された旅伏小学校ではもうこれでやるしかないという事だが、先をいつている事例を見て、私達がどう考えていくのかという事だと思う。
- ・ いろいろ地域を知れて良いという意見もあれば、1つ1つの小学校区で大事にしていた地区が廃れる、そこは危惧される場所ではある。

武田委員：

- ・ 資料3の令和6年の出生数を見ると邑南町は36人。邑南町全体で同学年が36人しかいない学年になった時に何が適切かという事を考えなければいけないと思っている。
- ・ そう考えると今の2025年現在での最新事例やいろいろな取組みというのは

もちろん参考になるが、これだけでは間に合わないような気もしている。

- ・ 時間軸を長くって考えると今の学校システムの常識はおそらく明治以降にできたものだとすると100年ぐらい前の事。この100年というのは人口が増えて成長するというのを前提とした教育モデルだったと思うが、これから明らかに時代のフェーズが変わってくる。今までの常識や在り方というのは、一旦置いておく必要があるような気がしている。
- ・ ふるさと教育に関しては、人との出会いの方が大事な気がしていて、あまりシステムじゃないような気がする。何か近所の面白いお爺さんの話を聞いたとか、あそこのお兄さんが面白かったとか、お姉さんがこんなことを言ったとか。そういう人に出会う確率を上げてあげればいいような気がしている。
- ・ 小規模校だとしてもいい人との出会いがあったら育つし、なかったら育たない。大規模校になると同級生の出会いの確率が上がるし、いい人がいる確率が高い。だが、出会えない子もやっぱりいて、そう考えると人というのをどこに生まれたから、何年生まれだからという固定化した人との出会いを制限するようなシステム自体があまり時代に合っていないような気がする。正解が何か分からないが、何となくそういうイメージを持った。

松本委員長：

- ・ 非常に重要な発言だと思う。町全体で36名。つまり町全体で1つの学校の1クラスぐらいの人数。これを割るとクラスが成り立つのか。
- ・ これまでの昭和時代、昭和から平成で見ていると、学校で最後の1人になったということがよくニュースになっていたが、1人で何が出来るのか、運動会はどうするのかとか。合同でやれば出来たりはするんだろうが。
- ・ 未来を見ると、日本の人口は1億人を割って9000万人になると言われている。大正時代とか明治時代の人口に戻ってしまう。人数の事で私たちが未来の邑南町の子ども達の事を考えるならば、今が確かに分岐点で、町長が2つの委員会を立ち上げ、それぞれしっかり考えてほしいという気持ちはよくわかった。

山下委員：

- ・ 私もずっと若い時から集団の教育力という事で、どちらかというと集団づくり、学級づくりを基本とした授業をやってきた。だから一定数の子ども達を前提にして学力も人格も形成されていくはずだと常に考えてきた。
- ・ それが自然に人口減で、目の前の子ども達が一気に少なくなっていく中で、ひょっとしてそれは、児童生徒の学力形成や人格形成にどこかでマイナス要因として私たちの知らないうちに彼らに押し寄せてきているのかなと思うこと

が最近多くなってきた。

- ・ しかしそれをカバーしているのが、学校の教育力というか、教師の人間力だと思ってきたけれど、それも限界にきている。
- ・ それを前提に考えると子ども達の適切な学力形成と人格形成のために、必要最低限の枠、数と言うのか、やはり検討しないといけない時が来ていると思う。登下校の問題や時間の問題、いろいろあるのかもしれないが、それをきちっと踏まえた上で考え、進めていかなければいけない時なのかと思っています。

松本委員長：

- ・ 私も思っていて、複式学級は松江市や出雲市にもあるが、現在邑南町では複式にしても3年生がいないとか、3、4年生がいないとかそういう問題がある。学級自体がない。要するに子どもがいないと、子どもを育てるという理念があっても立ち行かない。

これまでいろいろな問題、課題、そして未来の話が出て考えてきたが、次の3回目の委員会では、より踏み込んだ委員の皆さんの意見をいただきたい。

今日用意された資料以外に、こういう資料が見たいという事があれば、事務局に言ってほしい。

委員会で考えているだけではなく、町の人達はどう思っているのかを参考にしたいので、アンケートを取りたい。

2回目の委員会で非常に深いところまで踏み込み始めていると思う。

今まで学校の事を考えてきたが、用意してある資料に、これまで10年ぐらいの邑南町の子ども達が、それぞれの公民館でどういう活動をしているのかがわかる新聞記事と公民館だよりがある。自由に見て感想など言ってもらいたい。

③ その他 新聞記事・公民館だよりを一同で確認

- 例えば地域の人達が、地域のこの先心配な事を考えるきっかけになるような講座を公民館がした事例はないか。
- 子ども達が学校のふるさと学習で学び、そこから例えば販売までやってみようという提案した。それを公民館が引き受けて、子ども達と取り組んだようなことはないか。
- 子ども達に「地域に愛着や誇りを」と言っているが、大人が持っていないと子ど

も達が持つわけがない。大人のふるさと学習も必要ではないかという議論もしたことがあって、そのようなことを邑南町では公民館がやる機会はあるのか教えて欲しい。

- 大人のふるさと教育はとても大事。子どもと大人と一緒に学ぶふるさと教育。親子での学びは本当に大事で、絆も深まるし、親の思いが伝わる。
- 親子で学ぶふるさと教育は大事だと思うが、親も子も忙しく、時間が作れない。地域に、ゆとりを持って生きていける仕組みづくりも必要かもしれない。
- 忙しい子ども達の習い事を含めた学びのリアルな時間、1日の過ごし方を見たい。
- 前回の委員会で、公民館の活動も学校での子どもの学びと一緒に考えたらという話があった。
- 小規模学習の機能は、公民館に任せるのが1つあると思う。ふるさと教育も、集団で学ぶところは学校で担って、その他は流動性のある感じで。
- 例えば学校のふるさと教育に公民館主事に入ってもらって一緒に授業していくような取り組みはどうか。
- スポーツで活躍して地域を盛り上げる人、東京や大阪にいて日本を支える人も邑南町から出てほしいし、地元で活躍する人もいてほしい。そのバランスがある。
- 自己実現する場所は、都会だけでなく、地元にもあるということを学校だけでなく、公民館等地域でも教育できればいいのではないか。
- 都会の真似をしすぎている気がする。そんなに忙しくしなくても、のんびり暮らして幸せということは大事なことだと思う。

～委員着席～

松本委員長：

- ・ (事務局に対して)新聞記事などの資料はいつでも見れるように、スキャナーで読み取って、PDFにして次の3回目の委員会までに委員に送付し、閲覧できるようにしてほしい。
- ・ いろいろな記事を見ながら、大人のふるさと教育、公民館の活用、子ども達の人数、習い事等、子ども達がどういう状況の中で日々の学びをしているのか、その実態を私たちはある程度共有できたと思う。
- ・ アンケートも町の人がどのように子ども達の未来を思っているか知るために必要になってくる。
- ・ しっかりと町議会や町長、教育長へ上げるため、私達委員の議論はしっかりと尽くしていきたい。今日の委員の皆さんの話を聞いていても、こうありきで

はなくて自分の悩みだとかご経験、この邑南町の子ども達の実情を知っているからこそ出る言葉かなと思った。

今日の感想、振り返り、コメント何でもいいので、委員それぞれの発言をいただき、終了したい。

土田委員：

- ・ 私が思っていた事が武田委員と繋がるが多かった。
- ・ 人数が少ないのであれば人数の少なさを活かして、子どもにどのような教育ができるのかというところをもう少し丁寧にやっていると、今の不登校の子ども達は、少し減っていくのではないかな。
- ・ 今現在の不登校の子ども達への対応もちよっと気になっているところなので、そこも丁寧にやっていたら良いと思う。これからも自分の視点からの思いをお伝えし、皆さんと一緒に考えていけるといいと思った。

松本委員長：

- ・ 将来、町全体で1学年36名となる。少ないからこそ多様な子ども達に対応する教育を考えていくことは、今日の合意の1つかなと思う。

武田委員：

- ・ まさに今仰ったとおりでなと思いながら聞いていた。こういう議論は、元気がなくなる事が多いと思っている。人口は減る、衰退するみたいなニュアンスではなく、もっとこれを逆手にとって良くなる可能性や豊かな地域になる可能性もあるかなと思う。
- ・ だから皆が前向きに議論が出来る土壌を広めていくのも、この委員会の役割の1つのような気がする。そういう意味ではアンケートの取り方もこのネガティブな部分だけではなく、未来に希望を持てるような、議論の種になるような展開の仕方ができると良いと思った。

松本委員長：

- ・ 武田委員に保護者代表という事もあるので、どういうアンケートが良いのか私と事務局と相談していただけたらと思う。

山下委員：

- ・ 今まで学校の中だけの子どもの動きを中心にみてきたが、彼らが校内で、家庭で、地域でどのような日々を過ごしているのか、そこでの彼らなりの学びあ

いというものはどのように行われているのだろうか。保護者との関係がその年代に応じて広がり、深まり、高まっていくのかということも含めて、これからも地域の中での1人ひとりの子どもの育ちというものが、今の学校の中での在り方にどのように起因してくるか、反響が多く出てくるのか考えていきたい。

- ・ 私は学校の中だけで考えていたけれど、これからは学校外に、いろいろな地域の人々との関係の中での学びということも含めながら、もっと総合的に、もっと大きな視点で1人ひとりの児童生徒の学び、あるいは人間づくり、人間形成みたいなことも考えていきたいと思った。

松本委員長：

- ・ 社会に開かれた教育課程と文科省が言っているが、都会を初め、いろいろな所で校外学習の先に地域という事が主流になっている。山中委員の話聞いていて、邑南町は、子どもの日々の生活に公民館との関わりがあり、邑南町だからこそ社会に開かれた教育課程のお手本ができるのではないかと考えた。
- ・ 先ほど武田委員が、子ども達の数が少なくなる負の事ばかりではなく、これを逆手にとってできる事、それが正に社会に開かれた教育課程で、山下委員も私もクラスづくりや教科、そんな事をずっと考えてきたが、それも子どもの学びを中心に考えていけたらと強く思った。

山中委員：

- ・ 事務局に事例や資料について話をした。1つは学校の中で限られた時間、教育課程の中で、ふるさとへの愛着、誇りみたいなところを、学校教育目標や重点目標にあるように取り組んではいるが、時間的に限界がある。
- ・ 子どもがせっかく本気になって取り組んでも時間の制約があるから次に行かざるを得ない。もう少し学びたいとかこれをやってみたいという思いを、誰が実現するのかと言ったら、それは公民館に受けてほしいという思いがある。公民館が学校でのふるさと教育、ふるさと学習を連携してつなげてほしい。
- ・ 実際そのような取り組み事例がないか事務局に聞きたい。
- ・ 学校と公民館が連携し、人との関わりが地域と学校で模擬的な社会の体験学習になって、その延長線で本当に地域へ出て、地域の大人と一緒に実践することができるという。
- ・ これもまた今日出てきたような人との濃い関わりが生まれていく。子ども達が地域との関わりについて学ぶ事を通してふるさと愛や誇りになっていくという良い循環ができるのではないか。

- ・ もう1つ全く別のことだが、住民の方々が小中学校の再編についてどう考えているのかというのはとても気になる。邑南町は地域の課題について、住民が集まって部会で話し合ったりして、町長に提言を出すような事をされた歴史もあると聞いた事があった。子ども達の教育について、住民の方々は一体どんな考えを持っているのかという事を参考までに知りたい。
- ・ やはり学校や子どもは地域の宝。地域の人思いなくして進める訳にはいかないということを再確認した。

松本委員長：

- ・ 最後に感じた事は、自分の子どもや孫が生き生きと働く、もしくは学んでいる姿を私たちは目指す。そのために何が必要かという事だと思う。
- ・ 少人数のクラスでも1人ひとりに目が行き届くので、多様な学びと本当に誇りを持てる人になってほしいと今日の委員会で思った。学校の事、公民館、さまざまな地域との共同というのが今日のまとめの言葉だと思う。
- ・ 次回以降に向けてアンケート等準備、相談するので、特にアンケートの方はご協力いただきたい。

非常に3回目以降に向けて充実した共通理解を図れたと思う。悩みも大きく人口減の中、暗くなることもあるが、明るい未来を目指して私達は議論を続けていきたい。

4. 次回会議の予定

委員それぞれ都合のつく日程を記入し、事務局で調整。

【閉会】